

2012年度

海外研修・研究等 助成事業 研修報告

大連の視察から 日本の技術者育成を 考える

静岡県立沼津工業高等学校 萬崎 清次

今回の研修では、3社の中国進出企業を訪問、中国における日本企業のものづくりの現状とこれからの日本のものづくりについて視察し、今後の日本の技術者が海外で働く上で必要な資質能力を考察した。現地法人社長へのインタビューでは、その経営課題に共通している事項が多かったことが印象的である。

1 中国企業との生存競争

中国企業も様々な製品を生産できる技術が向上し、現地の日本企業も進出時の優位性が低くなり、今では中国企業との生存競争が起きている。現地の日本企業は中国を生産拠点と捉えず、市場として見ている。中国では品質が低くても安価であることを優先する傾向が強いため、中国市場を見据えた生産管理が必要になっている。また、現地工場では、日本人従業員は数名程度であり、数百人から数千人の現地従業員で生産している。日本からの技術者は、新工程立ち上げ時に現地指導を行う程度で、あとは現地従業員で管理しており、中国人技術者も優秀である。しかし、近年は中国人従業員の待遇も向上し、条件次第では他企業へ優秀な人材が流出してしまうので、人材確保が難しくなっている。企業経営に安泰はなく、生き残るための危機感に追われている様子が見えてくる。

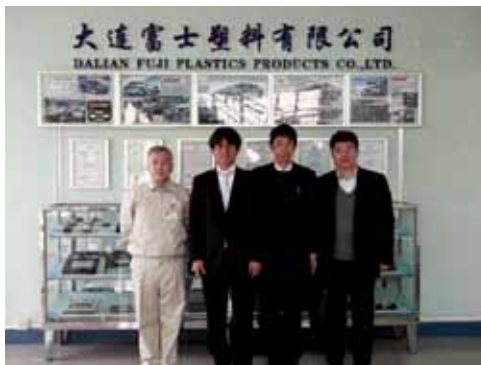
2 日本製造業の課題

日本の製造業が世界で競争力を維持するためには、日本が誇る強みを活かすことが重要であると感じた。一番の強みは、工程管理技術、システム管理技術である。「カイゼン」は世界の言葉となったが、ムリ・ムダ・ムラを減らし生産を向上させる技術は、人と人が連携し、知恵を生み出す組織力にある。その下支えとなるのは、日本人が持つ助け合いの力である。そして、作ったものを活かす創造力である。日本人は繊細なものづくりの能力が高い。日本製品は「ガラパゴス」と呼ばれた時期があるが、これはアイデアと技術力がある証拠だともいえる。

3 まとめ

工場立地においては、コストの低い地域や外国に進出するのは当たり前のことである。今では、日本の技術者も海外に出なければならぬことを痛感した。一方で、中国の技術者はチームプレーで成果を出すという力をあまり持っていない、または未熟なようだ。ここに海外でも活躍できる技術者を育成する上でのヒントがみえてきた。それは、①コミュニケーション能力の向上、②異国文化交流の推進、③協調性の育成、④基礎技術の定着、⑤創造力育成である。これらについて、今後の教育や実習指導において重要なポイントとして取り組んでいきたい。

今回の研修では、中国のものづくりが日本のものづくりに対して大きな脅威となっていることが驚きであった。また、文献やインターネットでは分からない、現場の生きた情報を得ることもできた。今回の研修成果を生徒、保護者、卒業生、また教師にも還元していきたいと考える。



大連富士塑料有限公司(富士ベークライト株式会社の子会社)にて